

受 験 番 号				

次の文章は『ビーズ つなぐ かざる みせる』のⅢ部「人はなぜビーズを身につけるのか」の中の「幼児を守るラバーリー社会のビーズワーク」の抜粋である。文章をよく読んで、問いに答えなさい。

インド西部に位置するグジャラート州カッチ地方。この地に暮らす主な生業を牧畜としているラバーリーの女性は、刺繍やアップリケ、ビーズワークで衣装や調度品をつくっている。それらは、日常で使用するほかに、ラバーリー社会において婚資や持参財といった財としての役割や、宗教儀礼における捧げものの役割なども担っている。

ラバーリーのビーズワークをみると、幼児のための首飾りや腕輪、耳飾り、髪飾りなどが多い。これはカッチ地方においてビーズワークが比較的新しい技術であることと関係している。イタリアのヴェネチア製のガラスビーズが東アフリカのグジャラート商人を通じて、1850 年頃に、カッチ地方の南に位置するサウラーシュトラ地方に入ったといわれている。そのため、ラバーリーにとって、ビーズはタカラガイと同様に現金を介して入手する貴重な素材であった。

入手が困難であった素材を、幼児に過剰につけることは、装飾的な役割もある一方、邪視除けとして病気などから幼児を守るためでもあるという。

ラバーリーは、姻族を増やして社会のなかでのセーフティーネットをつくるために 1970 年ごろまで幼児婚の習慣が続けられていた。そのため、幼児用の儀礼用衣装や装身具にビーズやミラー刺繍などが多いことは、儀礼時に幼児を邪視から守るためである。その後、幼児が成長するにしたがって、首飾りや腕輪は、ビーズ製から金・銀製のものへと変化していく傾向がある。また、人生儀礼においても、衣装や装身具のみならずビーズワークは多く登場する。例えば、花婿用の扇や儀礼品を運ぶための頭上運搬具などには、刺繍やタカラガイ、ガラスミラーとともに価値のある素材としてビーズが多用されている。

ラバーリーのビーズワークの技法は、ビーズに糸を通して編みながら紐状にする、ビーズをひとつずつ布に直接縫いつける、複数のビーズを平面状に糸を通して編み上げ、それを布に縫い付けるなど多様である。大がかりな道具を必要とする織りや染めと違い、針と糸といったわずかな道具による刺繍やアップリケ、ビーズワークは、持ち歩くことが容易であり、場所をとらず、すぐに始めてすぐに終わることができるため、ラバーリーのような移動の多い牧畜民に適した手工芸であるといえる。

ラバーリーのビーズワークの技術は決して難しいものではなく、単純な技法の繰り返しである。単純であるが社会と密接に関係するがゆえに、素材や色の組み合わせ方や、細部や端々までゆきとどいた丁寧な手仕事は、人目を惹きつける力を持っているのであろう。

出典：上羽陽子「幼児を守るラバーリー社会のビーズワーク」『ビーズ つなぐ かざる みせる』 国立民族学博物館, p74, 2017

問. 上記の文章は人々の生活とものづくりの関係を紹介した内容である。これからの時代において、伝統、文化、人の観点からあなたが考えるものづくりの在り方を具体的な事例を挙げ、600～700 字で述べなさい。